



竹内佐千子さんの『赤ちゃん本部長』は、株式会社モアイの営業本部長、武田清政氏（47）が主人公。武田本部長が「朝起きたら、赤ん坊になっていた」という設定です。カフカの『変身』は、主人公が虫になってしまう不条理かつ恐ろしい寓話ですが、『赤ちゃん本部長』はシュールなコメディです。

株式会社モアイはそこそこの規模を誇る企業です。赤ちゃん本部長、武田氏が率いる営業部は一課、二課があり、数十人の部下を束ねています。営業部以外に庶務部、経理部、広報部、さらには海外支社もある設定となっています。

赤ちゃん本部長は、意識は大人の男性ですが、身体的には生後8か月くらいの状態。歩行器がないと歩けず、おむつが必要です。新人研修で訓示をしている最中に、盛大にうんこをもらしてしまいます。手が小さすぎてパソコンのキーボードを5本指で操作できないため、音声入力用ヘッドセットでメールを作成し、社外取引に行く際は、部下に抱っこしてもらいます。

社内での日常的な身体介助は、営業一課の男性社員たちが分担してあたります。子どもがいる西浦は、おむつ交換や外出介助にかいがいしく働きます。独身主義の天野課長は本部長の衣装担当。本部長とも妻の娘であるミイコは、出産も育児も経験していませんが、愛車にチャイルドシートをつけて送迎をします。昼休みに離乳食を食べながら「みんなありがとう。悲観することなく仕事ができているのはお前たちのおかげだぞ」と話す赤ちゃん本部長。

しかし、バリバリ働く男性中心の企業風土はいまだに残っています。本部長は取引先の高齢男性から、「だいたい赤ん坊っていうのは母親のものだろう」「誰かいい女性を見つけて育つまでゆっくり休んだらどうかね」と、心ない言葉を投げかけられます。

「お言葉ですが、赤ん坊を母親のものと思うのは感心しませんね。赤ん坊でも一人の人間です。誰のものでもない！」本部長は毅然と席を立ちます。部下の西浦に抱えられて。

武田氏の事情を聞いた社長が、赤ちゃん本部長を呼び出します。本部長を抱え上げて「まさか本当だとは」と驚く社長。武田氏は「しかし社長、私は中身は変わっておりません。身体に多少無理をしてでも仕事をするつもりです」と返します。

社長は腕に抱えた本部長にいいます。「身体を酷使して良い結果など出ん。だからといってクビにするほどつき合いが浅いわけでもないだろう、武田くん！」「そもそも会社というものは…」熱を帯びた社長の腕の中で、いつの間にか本部長は寝てしまいます。

「24時間戦えますか～そんな時代はもう終わったんだよ。なあ武田くん」。社長は微笑みながら、スヤスヤと寝入る本部長につぶやきます（「24時間戦えますか」は平成元年にリリースされた、健康ドリンクのCM キャッチコピーです）。

私達は現実には、突然赤ちゃんになることはあり得ませんが、例えば突然に大病を患ったり、身体障害を負うことはあり得ます。その状況を「突然の赤ちゃん化」に置きかえると、武田氏の苦労は理解できそうです。本人はこれまでと同じように働きたいし、周りから変わったと思われたくもないものです。しかし、皮肉なことですが、周りは「むしろ今の方が安心できる」ということもあります。

ミイコが父の忘れ物のおむつを会社に届け、その帰りに社員食堂で営業一課の面々と昼食をとる場面ではこんなことを言われています。「もともと手のかかるワガママな父なので、ある意味赤ちゃんの方がラクというか」「パパって元々背も高くて体格も声も大きくて、運動もしてたからすごく力があって」「パパを怒らせたなら私じゃ到底かなわないって恐怖がどこかにあって素直に話せなかったんです」「でも今は赤ちゃんだから怖くないというか、ちゃんと話してみたらやさしいお父さんでした」。

社内報担当の岸谷が取材にやってきます。「赤ちゃんの本部長を認めて理解しよう」というテーマです。本部長は気乗りしません。「簡単に理解しようとか言うな。余計に誤解されるだろうがー」。

西浦は同性愛者であることを公言しており、パートナーと子どもを育てています。岸谷は西浦にも聞き取りをします。「ぼくも当たり前存在して生きていることは知ってほしいですが、『理解しろ』というのは少し違うんですよ」。岸谷は「しかし皆の理解を促し、平等な世の中に生きられるようにがんばりませんか！」なんとも嘯み合いません。

社内報の作成をひと段落させた岸谷は、健康診断の結果通知を開きます。再検査が求められた岸谷は、病院で医師から突然、重大な結果を告げられます。帰り道に「なんで？ 普通に生きてきただけなのに…」と涙を流す岸谷は、本部長が「世の中は不公平で理不尽なものだぞ」と言っていたのを思い出すのです。

ある日の営業一課は朝から大忙し。赤ちゃん本部長は居場所がなく、緑化されている会社の屋上に上がります。すると木陰のベンチに座る男性の姿が。メンタル不調で休職していた二課の渡辺です。突然赤ちゃんに「おい」と声をかけられて驚く渡辺。「うちの会社、託児所できたのかな？　そこの子かな？」とうろたえる渡辺。本部長は様子を見ることにします。

渡辺は赤ちゃん本部長に「怖くないよ」と声をかけて抱っこをします。「こんなに小さい君も会社に来てるのに、ぼくはどうしても来れなくてね」「なんでなのかたくさん理由を聞かれたけど…朝会社に行く電車に乗ろうとしても乗れなかつただけなんだ」「みんなに迷惑ばかりかけて、勝手に逃げてるんだ…」。渡辺の目から涙がこぼれ、本部長のほっぺたにこぼれ落ちます。ハンカチで拭こうとしたとき、膝に抱いた赤ちゃんがはっきりとしゃべります。「渡辺、泣きたいときは泣いた方がいいぞ」。

びっくりした渡辺はそのまま卒倒し、本部長は渡辺のスマホで部下に助けを求めます。その後、事情を把握した渡辺に、赤ちゃん本部長が言います。「渡辺、みんな失敗はたくさんする。迷惑はかけていいんだ。お前の繊細さは弱さである以上に強さでもある。いいか、何かあったら必ず誰かに助けを求めろ」

営業二課の女性社員、佐々木が、赤ちゃん本部長をじっと見えています。声をかけても目をそらすので「抱っこか？　なぜかみんな抱っこしたがるんだよな。オレはかまわんぞ」と本部長。抱え上げた佐々木は、なぜか声をあげて泣き出します。しばらくして落ち着いた佐々木は、膝の上の本部長に身の上を話しはじめます。

「わたし、赤ちゃんが憎いというか…」「昔、大親友に赤ちゃんができて、今まで通りに遊べなくなって、会えなくなって、それがすごくつらくて、赤ちゃんが嫌いになっちゃったんです」。

「でもその悩みは、そのお友達の方にもあったのでは…」と西浦が聞くと、佐々木は「そうなんです。私、彼女の気持ちも考えずひどいことをしてしまった。親友なら理解して、今まで通りにするべきだったんです」でも、と言葉を継ぐ佐々木。

「そんなマニュアル通りに、気持ちが動くと思いますか？」「頭ではわかってても、さみしくて悲しくなって、自分の心のせまさに落ち込んで…」とまた涙をこぼしてしまいます。

どうやら「赤ちゃん」という無力な存在を前にすると、大人たちは心の鎧を外しやすくなるようです。赤ちゃん本部長の周りでは、「責任感をもって、理性的でしっかりしていること」ばかりを求められる大人たちの本音を拾うことができます。

営業二課の橘部長（55）が本部長のもとにやってきます。西浦が男同士で子どもを育てて

いると聞いて、気がかりになったようです。「いったいそんなことを誰が許したんだね？ そんなわがままを許しても、本人たちも子どもも苦労して不幸になるだけだぞ」。

本部長は「もしその子たちの家庭が幸せになれないとしたら、橘さんのような考え方の人がいるせいでしょうね」と反論します。

その後、橘部長は息子から「僕はゲイなんだ。だからもうお見合いの話はやめてほしい」と告げられてしまい、涙を流します。その後で部長は「考え方をアップデートしたいから変な発言をしたら教えてくれ」と部下に頼み、「困った時に見てください」と書かれたメモを渡されます。

メモに書かれたのはとても基本的な四か条です。

- 1.知らない世界を否定しない
- 2.自分が正しいとは限らない
- 3.無理に理解しようとしなくていい
- 4.よくないことを言ってしまった後は謝る

メモの内容はとても簡単ですが、これができるには柔軟で謙虚な心が必要です。橘部長は問題発言を繰り返してしまうので、その度にスタンプカードにスタンプをためてもらい、5つたまるとトイレ掃除をすることになります。そんな橘部長もメンタルを病んでいた渡辺に、避難訓練で「ぜったいに守ってやるからな。大丈夫だぞ」と励まします。

株式会社モアイの人々は、みんなそれぞれに大なり小なり課題を抱えながら助け合っています。「不公平で理不尽」な世の中を生きていくために、そして多様な仲間を認め、守るために必要なことが『赤ちゃん本部長』にはたくさん描かれています。私たちに必要なのは、24時間戦うことではなく、弱さを認め合うことではないでしょうか。